

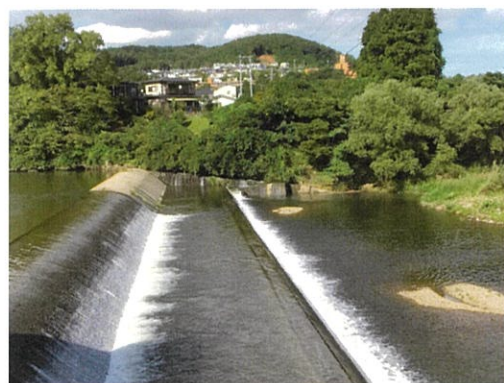
せんだい郷土エッセイ 「郷六ものがたり」

郷六 — すぐそばにある村を歩く③

伊達家の別荘「郷六御殿」

利水の適地なのだろうか。郷六には、藩政時代に城下町のすみずみに水を送り生活を支えた「四ツ谷堰」^{よつやぜき}のほかに、牛越橋近くの三居沢発電所に通水する「北堰」も築かれている。広瀬川が目の前を直流し河岸段丘の平地に広がる郷六は、水の管理がしやすかったのかもしれない。ちなみにどちらも現役だ。

長く郷六に暮らしてきた方たちに堰のことを聞くと、どこか誇らし気な口ぶりで出てくるのが「郷六御殿」^{ごうろくごてん}である。堰のことも郷六御殿のことも、この地域の長い歴史を物語るものとしてとらえているからなのだろう。郷六御殿は4代藩主綱村が貞享4（1687）年に2人の藩士に造営を命じて立てた別荘で、仙台城の西の守りを固める目的もあったといわれる。『宮城町史』（昭和42年発行）によると、広さは約2町歩（約2ha）あり、高さ1丈（約3m）の土手のまわりに巾2丈（約6m）の堀をめぐるし、楼閣は三層で、屋敷内には蔵や馬場も備えられていたという。梅の古木などが180株も植えられ、それが豊かに育ったからか、この地を「梅郷」、屋敷を「楽寿園」とよぶようになった。伊達家の人々は3階にしつらえられたという8畳間からまわりの山を見渡し、広瀬川の川面を眺め、鳥のさえずに季節の息吹を味わったことだろう。いまは6月、まさに梅の盛りの季節だけれど、お姫様たちも生い茂る梅林に青々とした梅の実がころころと育つさまを見て、心踊らせたのだろうか。もう建物の遺構はないが、郷六御殿の跡には「屋敷」という小字名が残されている。



手前が右岸。右岸側から取水され、青葉山の隧道を通して水は三居沢まで運ばれる。この堰の下で、子どもたちは泳ぎに興じたという。

井戸をめぐる暮らしの記憶

「郷六御殿の井戸はまだ残っているよ」と聞き、安達憲一さんと町内会長の安達和郎さんに案内をお願いしたのは2022年の年明けすぐのころだった。井戸は北堰に通じる細い道の住宅の前庭にあった。

井戸枠の上には屋根が架けられ、釣瓶井戸の錆びた滑車が吊り下がっている。これが300年も前から使われてきた井戸なのか、にわかには信じがたいのだが、和郎さんは「井戸は水道が入る前までは使っていたよ、まわりの畑の水やりにも使っていたし。そうだねえ50年くらい前かねえ」といい、井戸の前にある地面に斜めに立てられた石を「これ『足洗い石』」といって、この上で足を洗っていたんだよ」と指さした。斜め45度くらいに傾いた石は足をのせるのに具合が良さそうで、いかにも長い年月使い込まれたような黒っぽくなめらかな肌合いをしている。御殿で働く人たちが、庭仕事や馬の世話のあとここでさっぱりと汚れを落としたものか。『宮城町史』には「井戸は現在も三居沢発電所取水口番宿舎において使用している」とあるから、時代を経てもこんこんと良い水

が湧き出て働く人を癒やしたのだろう。

いまは発電所の宿舎はないが、井戸からは網のフェンス越しに北堰が見下ろせるほど川が近い。

「昔はフェンスはなかったから川に近づけた。夏は堰の下で泳いだし、昭和40年ごろまでは堰の上のところの中洲になっていて、野球をしたりしたんだよ」と和郎さん。堰堤は平らなので、歩いて対岸へ渡る人もいたらしい。憲一さんは、「堰のこちら側（右岸）の人たちの中には、舟を持っている人もいましたよ」と話す。二人で「アユ、ウグイ、コイ…釣れた魚は夕飯のおかずにした」となつかしそうに話されるが、真冬の風景は何とも寒々しい。夏の日差しの中で聞けば、また新たなおもしろい話に出会えるかもしれない。そう思った。



郷六御殿跡に残る井戸。手前にあるのが「足洗い石」。安達和郎さんのお話を聞かなければ、私はこの石に気づくこともなく通り過ぎていただろう。近くには、仙台市文化財課が立てた郷六御殿の説明標識がある。

人が亡くなり変わる風景

この5月、松尾神社の春の例祭で憲一さんから思わぬことを知らされた。2月に、和郎さんが亡くなられたというのだ。「12月に病気が見つかって…あまりに急で私も気持ちの整理がつかないんです」。憲一さんは「今年は田植えは難しそうです。ほら、あの宇那禰神社うなねじんじゃの下の田んぼですよ」と続けた。

あれは和郎さんの田んぼだったのか…。昨年9月末、大雨のあと、気になって私は郷六を訪ね神社の近くを歩き回った。宇那禰神社のこんもりとした鎮守の森と小さくはあるがその下に広がる水田は一對のもので、郷六の一昔前を教えてくれる大切な風景とっていたから。稲は一部倒れていたが無事だった。田んぼに入れられた排水用のホースを、農家の応急処置なのだな、と目に止めた。



2022年9月末。安達和郎さんの田んぼは、大雨の中、倒伏をまぬがれていた。半月後には、稲刈り、そして宇那禰神社の秋祭りが開催された。

わずかに数回お会いしただけなのに話を聞いた方が亡くなると、立ち止まって考え込むような気持ちにさせられる。ここでどんな人生を歩まれてきたのだろうか、と。それはたぶん、その人から大切な思い出話を受け取っているからだ。「うちの婆さんは、ヨコダカゴっていう四角いかごを背負って野菜の振り売りをしていたよ。お袋もリヤカー引っ張って売っていたね。作ってた米はササニシキ、トヨニシキ、ササシグレ。葛岡の登り口に精米所があって、そこに持って行ったんだ…」和郎さんが聞かせてくれた話を思い起こす。

梅雨の雨の中をぬって田んぼを再訪すると、一面に枯れ草が広がり、あちこちに大きな水たまりができていた。人が一人亡くなると、地域の風景は一変する。春に田植えをし秋に刈り取る、堀をさらい草を抜く…。そうやって手をかけ暮らす人の存在の大きさを思わずにられない。

〈取材／2022年1月～2023年6月〉